

世紀末イスタンブルの「声」と「文字」

——オスマン近代演劇ポスター印刷の現場を掘り起こす

江川 ひかり

一 問題の所在

一九世紀末から二〇世紀初頭（以下、世紀末と略す）にかけて、オスマン帝国（一三〇〇頃—一九二二）の都イスタンブルでは近代演劇が隆盛を極めた。この演劇文化を伝える貴重な史料であるオスマン近代演劇ポスター・プログラム（以下、ポスターと略す）一七〇点が、現在、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所に所蔵されている。これほどの点数を有するポスターコレクションは世界でも稀有である。

筆者は一九九〇年代前半に、これらのポスターを整理する幸運に恵まれ、各ポスターの劇団、演目、劇場、上演年月日、俳優・演出家など上演の必須要素に関する劇団別基本表^①を作成し、修正を継続してきた。この劇団別基本表に依拠しつつ、二〇〇〇年代に永田雄三代表の研究プロジェクトとして考察を進め、二〇一五年に本邦初のトルコ演劇史に関する研究書『世紀末イスタンブルの演劇空間―都市社会史の視点から』^②が公刊された。

ポスターは一枚の印刷物のため製本は不要で、簡易な印刷器械があれば制作可能である。ただしポスターは、今日のポ

スターやちらし、もしくは劇場配布プログラムのような役割をもつため、上演後は、収集家でない限り、包み紙や裏紙として再利用されるほかは廃棄されたであろう。そのためポスターが歴史学研究の史料として用いられることは少なく、たとえ用いられたとしてもその印刷所に関しては、演劇研究においても、印刷・出版、ジャーナリズム研究においても、些末な問題としてとかく後回しにされる傾向にあったといえよう。⁽³⁾

オスマン帝国における印刷・出版史の概要は林佳世子⁽⁴⁾によって、一九世紀中葉以降のオスマン帝国におけるジャーナリズムの発展に関しては、佐々木紳によって研究されてきた。イスタンブルにおいて印刷業と演劇文化とをけん引してきたのは、非ムスリムであった。⁽⁵⁾とりわけ、一九世紀前半に石版印刷技術が導入された後、官営印刷所以外でも簡易な石版印刷所が多数活動をはじめ、本の量産がさかんになり、一八六〇年代には、官報以外の新聞の発行がイスタンブルで本格的に始まったという。⁽⁷⁾多文字や挿絵印刷を容易にした石版印刷の普及と近代演劇の隆盛とが時期として合致した。したがって演劇ポスターは、演劇上演の広告であると同時に、それを手掛けた印刷所にとっても「わが社はこのような文字、字体、挿絵の印刷が可能です」という広告媒体ともなり、印刷物として一つのジャンルを切り拓いたといえるだろう。

筆者はポスターに記録された様々な情報に注目して、世紀末イスタンブル都市社会の変遷を復元しようと試みてきた。⁽⁸⁾イスタンブルの消費生活に決定的な変容をもたらした事件はクリミア戦争（一八五三―五六）で、同戦争の前線へむかう何千人という外国人兵士がまずイスタンブルに滞在したため、必然的に住民は西洋の生活様式を間近に見ることとなった。一説には、オスマン人が昼食をとる習慣はこの時期に遡るといわれる。⁽⁹⁾このクリミア戦争がひとつの画期となつて、ギリシア語、アルメニア語、アルメニア文字のトルコ語、ヘブライ文字のスペイン語（ラディーノ語）、ギリシア文字表記のトルコ語による新聞が発行され始めた。⁽¹⁰⁾

近代演劇の草創期、西洋演劇受容の先頭に立って活躍したのはアルメニア人であった。「かれらは最初、アルメニア語で芝居を上演していたが、イスタンブル人口の多数を占めるトルコ人を観客として獲得するために、トルコ語で公演をす

る必要があった⁽¹¹⁾」のだが、その際、アルメニア人俳優が話す「アルメニア語訛り」のトルコ語が問題になったという。また、トルコ人男優の場合も、難解なオスマン・トルコ語ではなく、イスタンブル住民にわかりやすい、標準的な「舞台言語」を創り出さなければならなかったため、「正しい」トルコ語を学ばせるための「演劇振興委員会」が一八七二年の末に組織された⁽¹²⁾。近代演劇の稽古場や舞台は、アルメニア人、ギリシア人、トルコ人俳優が、標準的な「舞台言語」を創り上げていく空間であった。そこは「多言語の共存」というよりはむしろ多言語が入り乱れ、混淆する場であったといえよう。そして、台詞や歌による演劇の舞台を、文字や挿絵で告知したポスターは、「声」と「文字」とをつなぐと同時に、発展する近代演劇文化と印刷文化とをつなぐ媒体だったともいえる。本稿では、ポスターに記録された情報からイスタンブル都市社会の変遷を復元する一助として、ポスター印刷の現場を掘り起こしてみたい⁽¹³⁾。

二 演劇ポスターはどこで印刷されたのか

本稿で対象とするポスター一七〇点のうち、上演年が明記された七八点の刊行年代は、一八八一年から一九二一年までである⁽¹⁴⁾。

オスマン演劇研究の第一人者であったM・アンドの統計によれば、タンズイマート改革期（一八三九―七六）から共和国成立（一九二三）までの間にイスタンブルで上演された演劇は二〇〇四作品である⁽¹⁵⁾。したがって一七〇点は、全体の八・五パーセントにすぎず、それらから導き出された考察は、普遍的な結論とはなりえないが、演劇および印刷・出版活動の傾向を知ることが可能となる。

印刷所名が記載されたポスターは一七〇点中一四五点、全体の八五・三パーセントにおよぶ。フランスにおけるポスターの歴史を著したヴェイユによれば、フランスにおいては一八四八年に、ポスターには印刷業者の名を明記することが

義務づけられたという。⁽¹⁶⁾ オスマン帝国では、一八五七年二月一五日に全九条および一つの特別条からなる印刷法令⁽¹⁷⁾が公布された。その後、オスマン帝国ではじめての一八六四年一二月に公布された出版条令は、ナポレオン三世時代のフランスで公布された（一八五二年）ものの翻訳であるといわれている。⁽¹⁸⁾

さて、表1「ポスター印刷所一覧」には、通し番号、印刷所名、所在地、同印刷所のポスター枚数、上演年代を記した。さらに、これらの印刷所がポスターの他にいかなる印刷活動をおこなっていたのかを知るために、H・ドウマンによる一八二八年から一九二八年まで発行された定期刊行物・新聞文献目録⁽¹⁹⁾の中にある同名印刷所の刊行物点数とそれらの発刊年代を示し、末尾には上述したウェブサイトで閲覧可能な主要ポスター番号を付記した。ただし、世紀末イスタンブールには多くの印刷所が存在していたため、同一名の会社が存在する可能性も高く、印刷所名および住所が合致しない限り完全に同定したとはいえないことをお断りしておく。

これらのうち最多数七七点のポスターを印刷したのは、旧市街大宰相府通りに巨大な社屋を構えていたターヒル・ベイ印刷所である。ターヒル・ベイ (Mehmed Tahir: 1864-1912) の人物像および出版・印刷活動の概要に関しては、すでに前掲書で詳述したが、雑誌『情報』⁽²⁰⁾が同社の主力雑誌として成長したために、ターヒル・ベイ自身も『情報』屋のターヒル・ベイと呼ばれていた。同社のポスターには劇団別のエンブレムが印刷され、文字が読めない人にもこれは「オスマン劇団」、あるいは「オスマン幻想劇団」と判別できる工夫をしていた。⁽²¹⁾

加えてターヒル・ベイは、一九〇三年の演目「ヴェールをした物乞い」のポスター⁽²²⁾の裏⁽²³⁾に、同社では「トルコ語、アラビア語、ペルシア語、フランス語、ドイツ語、英語、イタリア語、ロシア語、ブルガリア語、ギリシア語、アルメニア語、ヘブライ語など各種の書体やパンフレット」類をはじめ、「名刺 (kart-de-vizitler)」や商業文書、市役所・裁判関連文書等を石版印刷 (lithograpy) によって印刷できるという自社広告を出している。⁽²⁴⁾

O・コルオールによれば、エビュズイヤ・テヴフィク (Ebüzziya Tevfik: 1849-1913) が一八八二年に設立したエビュズイ

表1 ポスター印刷所一覧

番号	ポスター印刷所 (Matbaa) 名	印刷所所在地	枚数	年代	刊行物	発刊年代	主要画像
1	アフテル (Ahter Matbaası)	大宰相府周辺エビュースト大通り 54 番地	2	—	2	1884-1897	H3, I15
②	アラクス (Araks Matbaası/Araks Matbaası-Armenak)	大宰相府エビュースト大通り 57(1913), 20 番地 (年無)	7	1913	5	1910-1915	D15-16
③	アルシャク・ガロヤン (Arşak Garoyan Matbaası/Matbaa-i Arşak Garoyan)	大宰相府大通り	9	1910-1912	3	1901-1922	E17-18
④	ベルベルヤン (Berberyan Matbaası)	イスタンブル (Dersaâdet)	2	—	—	—	E20, H1
5	ジハン兄弟 (Cihân Birâderler Matbaası)	エビュースト大通り 11-13 番地	1	(推 1923)	4	1921-1928	F16-19
6	エヴカフ (Evkaf Matbaası)	シェフザーデバシュ	4	1920, 1921	6	1851-1928	F8-9, G8-11
7	石・文字 (Taş ü Hurûfat Matbaası)	イスタンブル、スルタン・ハمام泉近辺	1	1891	—	—	I19
8	審美眼 (Hüsn-i Tabiat Matbaası)	大宰相府	1	—	10	1911-1928	F23-25, G1
九	雷 (Imp. SERVET)	イスタンブル (Stamboul)	1	1903	—	—	C22-23
⑩	デルネルサシヤン (Impr.V.& H.Der-Nersassian/ Matbaa-i Dernasasyan)	イスタンブル (Stamboul/Desaâdet)	1	1904	2	1910	D7-8
⑪	ケチュヤン (Keçyan Matbaası)	大宰相府大通り (以下破損)	1	—	—	—	I9
12	ターヒル・ベイ (Malûmât-Tahir Bey Matbaası)	大宰相府大通り 40 番地	77	1899-1903	3	1898-1904	C8
⑬	アラムヤン (Matbaa-i Aramyan)	イスタンブル、火打石屋坂アゴバン・ハーン (商館)	1	1894	3	1881-1900	H23
⑭	ニコゴシヤン (Matbaa ve Lidografhane-i S. Nikogosyan)	旧市街 瀬戸物屋坂 (以下破損)	1	1887	—	—	I20
⑮	サルヤン (Matbaa-i Sarıyan)	大宰相府大通り 38 番地	2	—	—	—	H8
⑯	ティマクシヤン・サルヤン (Matbaa-i Timaksyan ve Sarıyan)	メルジャン市場ルシュディ・エフェンディ・ハーン (商館)	1	1888	1	1884-1897	E12
17	中央 (Merkez Matbaası/Imp. Merkez)	大宰相府大通り 66 番地	2	—, 1909	1	1908-1909	C19, D19
18	レシャディエ (Reşadiye Matbaası)	エビュースト大通り	1	(推 1911)	3	1911-1923	D11-12
⑰	サンジャクジャン (Sancakçıyan Matbaası)	イスタンブル、大宰相府大通り	2	—	3	1912-1914	E22-23, F2-3
20	植字工社 (Şirket-i Mürettibiye Matbaası)	大宰相府大通り 52 番地	9	1898-1899	17	1887-1927	C2, H14
21	笑い (Gülüş Matbaası)	ベイオール、リナルド通り 20 番地	1	1912	—	—	D4-5
二二	パラマリ (Imp. E.PALLAMARY/E. Palamar Matbaası)	ベイオール大通り ポロンヤ通り 21 番地	12	1891-1911	—	—	H25, C15-16
二三	レフラー (Impr.F.LCEFFLER/LOEFFLER Matbaası)	ペラ/ベイオール、地下鉄 (tûnel) 近辺	4	1910	—	—	A1-2, A4-5
⑳	歌 (Şant Matbaası/Imprimerie CHANTH)	ガラタ・ジャーミー門 9 番地	1	—	—	—	D21-22
25	未来の星 (Necm-i İstikbâl Matbaası)	無記載	1	1871	35	1925	F11-14
	印刷所名無記載、記載事項部分破損		25				
	合計		170				

ヤ印刷所は、スルタンからの物的支援で創設され、『セルヴェティ・フユヌーン』誌を発行したアフメト・イフサン印刷所およびターヒル・ベイ印刷所と同様に、当時の最新モデルの機械を輸入することによってイスタンブルから世界標準に近い高質な出版物の発刊を始めたとして、ターヒル・ベイ印刷所を三大印刷所のうちの一つに位置づけている。²⁶ターヒル・ベイの印刷所は、いわゆるムスリム系大手印刷所といえるだろう。この点を踏まえた上で、表1に関して次の三点を指摘したい。

第一に印刷所の所在地は、二五社のうち、一から二〇までは旧市街（当時の「イスタンブル」地区）に、しかも大多数は大宰相府通り（Bâb-ı Âli Caddesi）沿いもしくはその周辺であった。このことは同地域が当時の印刷・出版の中心地区であったことに起因している。二一から二四までは、新市街のベイオール・ガラタ地区に店舗を構えていた。ベイオール・ガラタ地区は、諸外国の在外公館、近代劇場が立ち並び、さらにはフランス系のガラタサライ・リセが開校（一八六八）されるなど、西洋文化の中心地であった。²⁷

第二に、印刷所の中で、非ムスリム系印刷所は全体の半数以上におよぶ。アルメニア系印刷所は、②③⑩⑪⑭⑱⑲⑳の七社、²⁸その姓からアルメニア系と推察される④⑬⑮⑯の四社、計一一社となる（表1〇囲み数字）。また、富はユダヤ系、パラマリはイタリア系、レフラーはフランス系であるため（表1漢数字）、非ムスリム系は合計一四社となる。ターヒル・ベイと政府刊行物を発行するエヴカフはムスリム系といえるが、他の印刷所の性格は管見の限り判然としない。

第三に、ポスターの年代と、定期刊行物との年代とを対照した場合、対照可能な②③⑥⑩⑫⑬⑮⑯⑰⑱⑲⑳の一〇社中、²⁹デルネルサスイヤンの年代に六年の差があるのに対して、他の九社はほぼ同年代に印刷・発刊されていた。³⁰ただし、これらの新聞・定期刊行物のジャンルは、法令・法規等の政府刊行物、政治・経済・科学等の情報誌、大衆紙等であり、演劇専門紙ではなかった。したがってこれらの印刷所が「演劇専門刊行物を出版していたためにポスターも印刷した」とは言い難い。唯一の演劇専門紙を印刷していたのはアラクスで、一九一二年に『ナナ（Nana）』を発刊したが、同紙の所蔵先

では一号しか確認されていない⁽³²⁾。

表1に示した二五社それぞれを詳細に紹介したいが、本稿では紙幅の関係上、最小限の言及にとどめる。1のアフテルは、大宰相府エビュスト通り五四番地に店を構え、オスマン語のみ(H5)とオスマン語とアルメニア文字(H3)のポスターを印刷している。両興行とも上演年は無記載だが、アナトリア側のカドウキョイ地区で上演された寄席演芸形式の大衆演劇であった。ところで、ペルシア語で「アフタル」(トルコ語では「アフテル」といえば、ペルシア語紙『アフタル(Akhtar)』(一八七六—一九六)を発行していたアフタル印刷所がある。同社は「ペルシア語、トルコ語、ギリシア語、アルメニア語、フランス語」といった各種の言語で書籍を印刷したといわれているが、このアフタル社は、イランからイスタンブルに一八六〇年頃に社主がやってきて、ヴァリデハンに印刷所を構えていたため、先のアフテルとは異なると考えられる。

④のベルベルヤンとは、「アルメニア人ニシヤン・ベルベリアン(Nishan Berberian: 一八四二—一九〇七)は、多才な男で、印刷業者、翻訳家、風刺画家として各分野で著名である⁽³³⁾」といわれる人物がいるため、彼もしくは彼の一族の印刷所という可能性がある。

⑩のデルネルサスィヤンに関しては、一九〇四年ポスター(D78)には「Impr. V & H. Der-Nersassian」とローマ字で印刷されている。ただし、セロプヤンはDer-Nersyanと綴り⁽³⁶⁾、アルメニア人印刷所の中でもっとも有名な印刷所のひとつである同社は、一九〇一年にスルタン・ハмамで公衆浴場が営業を終了した建物に創設され、事業が拡大するにおよび一九〇八年ごろにスィルケジにあるラリ・ハーンへ引っ越したと述べている。他方、ドウマンの目録では「Matbaa-i V. ve H. Demersisyan」と綴られ、ガラタサライ・リセ(高校)のオスマン語・フランス語両言語を用いた出版物(一—三号)を一九〇九年から一九一〇年にかけて印刷していた⁽³⁷⁾。以上のようにポスター印刷所の特定は、名称、住所、社主の経歴、印刷物などの諸情報を一致させる作業が不可欠となる。

三 多文字ポスターはどの印刷所で制作されたのか

アルメニア文字のトルコ語で発行された新聞・雑誌は、イスタンブルで一八四〇年から一九一四年までに三一を数える。⁽³⁸⁾すでに述べたように、オスマン近代演劇を劇場経営、劇団組織、演劇公演、そして俳優としても草創期から中心的役割を担ってきたのはアルメニア人を中心とする非ムスリムであった。このことから、近代演劇草創期に、ポスターがアルメニア文字、⁽³⁹⁾加えてギリシア文字、ヘブライ文字によって印刷されることは、自然な流れだったと考えられる。

ポスターにも、ギリシア語、アルメニア語、アルメニア文字のトルコ語、ヘブライ文字のスペイン語、ギリシア文字表記のトルコ語（カラマンル）が確認される。これらに加えて、アルメニア文字表記のフランス語や、ドイツ語も記された。そのため、文字だけではなく言語にまで踏み込むと条件が煩雑になるため、本稿では「印刷」の観点から文字に限って検証した。一七〇点のポスターに使用されている文字とポスター点数は次のとおりである（表2参照）。

オスマン語（アラビア文字のトルコ語） 一文字（配役・印刷所名のみローマ字併記を含む）は九七点、二文字使用ではオスマン語・アルメニア文字（のトルコ語・アルメニア語・フランス語）（表2ではOAと略す）二〇点、オスマン語・フランス語（OF）一三点である。次にオスマン語・アルメニア文字・フランス語（OAF）の三文字を用いたものは一点、四文字使用は、オスマン語・アルメニア文字・ギリシア文字・ヘブライ文字が二点、オスマン語・アルメニア文字・ギリシア文字・フランス語が一〇点、オスマン語・アルメニア文字・ギリシア文字・ドイツ語が一点、合計一三点、そしてオスマン語・アルメニア文字・ギリシア文字・ヘブライ文字・フランス語の五文字を用いたものは一点のみであった。オスマン語のみ一文字のポスター九七点の年代は、表2に記入しなかったが、ターヒル・ベイ五八、アラクス六、植字工社六、エヴカフ三、アルシャク・ガロヤンとベルベルヤン二点で、158⑪⑮⑯1825の八社が各一点を印刷し合計八五

表2 印刷所別多文字使用ポスター一覧

番号	ポスター印刷所名	1文字	2文字 (OA)	2文字 (OF)	3文字 (OAF)	4文字	5文字
1	アフテル	1	1				
②	アラクス	6		1 (1912)			
③	アルシャク・ガロヤン	2	1		1	5 (1910 : 2)	
④	ベルベルヤン	1	1				
5	ジハン兄弟	1					
6	エヴカフ	3		1 (1921)			
7	石・文字		1 (1891)				
8	審美眼	1					
九	富				1 (1903)		
⑩	デルネルサスィヤン				1 (1904)		
⑪	ケチュヤン	1					
12	ターヒル・バイ	58	4 (1903 : 3)	7 (1900 : 1, 1903 : 1)	7 (1899 : 1, 1900 : 3)	1	
⑬	アラムヤン		1 (1891)				
⑭	ニコゴスィヤン		1 (1887)				
⑮	サルヤン	1					
⑯	ティマクスィヤン・サルヤン	1	1 (1883)				
17	中央	1		1 (1909)			
18	レシャディエ	1					
⑰	サンジャクジヤン			1			1
20	植字工社	6			3 (1898 : 3)		
21	笑い				1 (1912)		
二三	バラマリ		1 (1891)	8 (1909 : 1, 1911 : 7)	1 (1909)	2 (1908 : 1, 10 : 1)	
二三	レフラー			2 (1910 : 1)		2 (1910)	
⑳	歌			1			
25	未来の星	1					
	印刷所名無記載、 記載事項部分破損	12	8 (1881 : 3, 83 : 2, 84 : 1, 85 : 1)	1	1	3 (1883 : 1, 91 : 1, 1916 : 1)	
	合計	97	20	23	16	13	1

注 4 (1903 : 3) は、4点のうち3点は1903年のポスターを、残りは上演年代無記載を意味する。

点、残りの一二点は印刷所名無記載である。ただし、九七点のうち上演年代が記載されているものは二八点にとどまり、一八点がターヒル・ベイによる一九〇〇年のポスターで、他の一〇点は一八八八年から一九二〇年まで確認される。

次に二文字印刷としてオスマン語とアルメニア文字が使用された二〇点は、一八八〇年代に九点、九〇年代に三点、一九〇三年に四点、年代無記載五点である。前述のとおり、アルメニア文字によるポスターが近代演劇の草創期の一八八〇年代、九〇年代に多いことは当然であった。たとえばオスマン語とアルメニア文字が完全併記のポスターが確認される(画像119)。これに対して、オスマン語とフランス語の二文字印刷は、二〇世紀初頭に集中している。

オスマン語、アルメニア文字、フランス語三文字は、ターヒル・ベイによる一九〇〇年の六点などである。四文字および五文字を用いた一四点のポスターのうち、一八八三年および一八九一年の二点(印刷所名無記載)を除いた一〇点は、一九〇八年一点、一九一〇年五点、および一九一六年一点である。このことは、第二次立憲政期を迎えて、出版・言論の自由が解禁された一九〇九年以降の社会潮流を物語っている。加えて、印刷所名は無記載だが、オスマン語、アルメニア文字、ギリシア文字に加えてドイツ語も記されたポスターも一点存在する(C14)。これは歴史的に友好国であり、オスマン近代演劇が非常に大きな影響を受けたフランスが第一次世界大戦中は敵国となったため、ポスターから排除され、代わりに同盟国となったドイツの言語が用いられたと理解できる。

表2から読み取れるように多文字ポスターに関しては、年代あるいは印刷所名の記載がまちまちであるため、深く分析できるサンプル数が十分には得られない結果となった。ただし、サンプル数の多いターヒル・ベイの印刷所のほかには、オスマン語・フランス語ではバラマリが八点を制作した。さらに、四文字を用いたポスターでは、アルシャク・ガロヤンが、オスマン語、アルメニア文字、ギリシア文字、フランス語を用いた、両面印刷のプログラム(画像E118)⁴⁰など五点が確認される。同社は、表1で示した定期刊行物として、郵便電報電話省によって月刊で発行された『郵便電報誌』といった政府刊行物も手掛けていた。

図1 オスマン語とアルメニア文字を併記したポスター（画像 I19）
1891 年 12 月 11 日、オスマン劇団・オスマンドラマカンパニー、シェフザー
デバシュ円柱通りにあるオスマン劇場、「男優」正劇 6 幕、石・文字印刷所

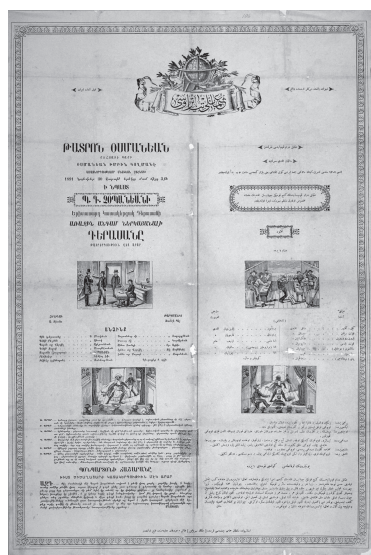
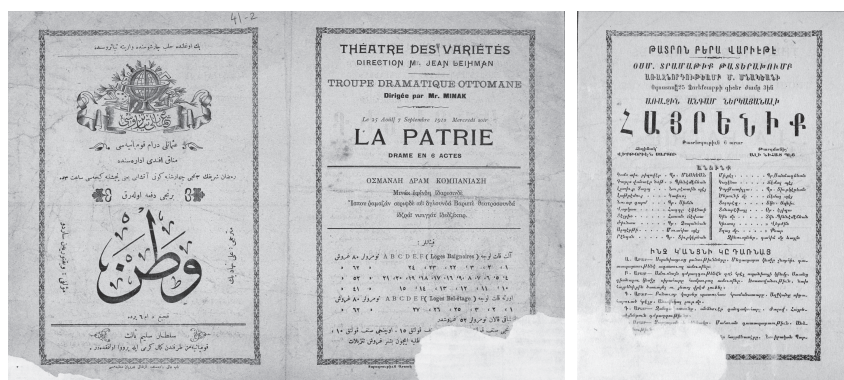


図2 四種類の文字が用いられたプログラム（画像 E17-18）
1910 年 8 月 25 日、オスマン劇団・オスマンドラマカンパニー、バイオールの
アレppo小路にあるヴァリエテ座、「祖国」悲劇 6 幕、アルシャク・ガロ
ヤン印刷所



東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所蔵

四 今後の課題

以上、本稿ではオスマン演劇ポスター一七〇点に依拠して、ポスターに記された二五の印刷所名と所在地、さらには各社が印刷したポスターにおいてどのような文字が用いられているのかを整理した。その結果、二五印刷所のうち二〇は、大宰相府通り周辺に社屋を構え、四社はベイオール・ガラタ地区で営業していたことが確認できた。オスマン語とアルメニア文字とを用いた二文字使用のポスターは一八八〇—一九〇年代に多くみられるのに対して、オスマン語・フランス語のポスターはむしろ二〇世紀初頭に集中している。多文字印刷所としては、大手のターヒル・ベイ、政府刊行物もあつかうアルシャク・ガロヤン、フランス語のパラマリなどの活動が明らかにされた。

ポスター印刷の現場を掘り起こす作業は、課題が山積している。第一に、印刷所の完全なる同定はまだ不十分である。そのためには、印刷所の操業年代と同期間の住所および発刊書籍に関する情報収集と、現物確認とが不可欠である。各印刷所から出版された書籍がすでに確認されている、M・S・オゼゲの『オスマン語文献目録』⁽⁴⁾に基づき書籍類も検証しなければならぬ。

第二に、とくに戯曲は、フランス語原作の小説からオスマン語へ翻訳された後に戯曲として翻案されるという手続きを踏む事例が多いため、ポスター演目と翻訳小説・戯曲の解明が必要となる。⁽⁴²⁾一九〇八年から一九二三年に印刷された戯曲目録には、アルシャク・ガロヤンの四作品、審美眼、未来の星、ジハン兄弟印刷所が出版した戯曲それぞれ一作品が確認されている。⁽⁴³⁾印刷所を明らかにすることは、やはり、演目の原作・戯曲や劇団の性格、上演劇場、年代すべてが密接にかわってくるのだ。

第三に、本稿では、ポスターに使用された文字の種類と数のみを整理したが、文字だけでは不十分である。とくにアル

メニア文字によるトルコ語、アルメニア語、フランス語、ギリシア文字によるトルコ語、ギリシア語、ヘブライ文字によるスペイン語という言語の問題も解明しなければならない。

世紀末イスタンブルの日常生活において、オスマン語、アルメニア語、ギリシア語、ラディーノ語などが肉声として飛び交っていた。ただし、彼ら・彼女らの「声」として発せられることが「文字」になって、壁に掲示されたり、手渡しビラとして渡された時、人びとは文字のもつ力を強烈に感じ、まったく読めない文字に当惑する者、好奇心から勉強する者がいたに違いない。佐々木紳は、トルコ語を解する者は、文字を学ぶことによって「アラビア文字表記のトルコ語はもとより、ギリシア文字やアルメニア文字で記されたトルコ語の出版物にも触れることができた」と述べている⁽⁴³⁾。世紀末の国際都市イスタンブルにおける演劇および印刷・出版文化は、人びとの好奇心やエネルギーに支えられて発展した。多言語・多文字は「共存」するのみならず、ぶつかりあい、柔軟に、変幻自在に混淆したのである。グローバル時代といわれる今日でさえ、このような多言語・多文字の演劇ポスターが、百年以上前のイスタンブルで「印刷」されていたとは、現物をみなければには信じられないであろう。

註

(1) 「劇団別基本表」は、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所・情報資源利用研究センター (IRC) の事業として採択された「オスマン演劇ポスター画像データベースの公開」プロジェクトの一環として、ポスターの画像とともに、二〇一七年三月に同研究所のウェブサイト (<https://osmanliyatiro.aa-ken.jp/>) に公開され、筆者が継続して更新している。本稿で記した (A12) といった画像番号は、同ウェブサイトから閲覧可能である。

(2) 永田雄三・江川ひかり『世紀末イスタンブルの演劇空間——都市社会史の視点から』(白帝社、二〇一五)。

(3) 例えば、オスマン古文書館所蔵「オスマン演芸芸術関連史料集」(*Arşiv Belgelerine göre Osmanlı'da Gösteri Sanatları: Geleneksel Seyir Sanatları, Tiyatro, Sinema, T.C. Başbakanlık Devlet Arşivleri Genel Müdürlüğü Osmanlı Arşivi Daire Başkanlığı, İstanbul, 2015, 188-189*) に掲載された、一八八九年上演の演劇ポスター画像では印刷所名(イスタンブル、メルジャン小路ルシユディ・エフエンディ・ハーン

に隣接する20番地サルヤン印刷所)が読みとれるが、転写では割愛されている。

- (4) 林佳世子編「イスラーム世界と活版印刷」小杉泰・林佳世子『イスラーム 書物の歴史』(名古屋大学出版会、二〇一四)、三五二―三七四。

- (5) 佐々木紳「ジャーナリズムの登場と読者層の形成―オスマン近代の経験から」秋葉淳・橋本伸也編『近代・イスラームの教育社会史―オスマン帝国からの展望』(昭和堂、二〇一四)、一一三―一三七。

- (6) レコンキスタ後イベリア半島からオスマン朝へ移住したユダヤ教徒は、一四九三年にイスタンブルで印刷活動を開始し、アルメニア教徒は一五六七年に、ギリシア正教徒は一六二七年に、イスタンブルで印刷所を開設した(林「イスラーム世界と活版印刷」、三五六―三五七。İskit, Server R., “Tahvil ve Tarihçe,” *Türkiyede Matbuat Rejimleri* (İstanbul, 1939) 3.

- (7) 林「イスラーム世界と活版印刷」三六六―三六七。

- (8) 江川ひかり「トルコ近代演劇―シャーロック・ホームズ登場 ポスターに浮上する劇場都市」『ISTANBUL 海峡はコスモポリタン』(PARCO 出版、一九九四、八七―九三) および永田・江川前掲書、第四章を参照されたい。

- (9) Toprak, Zafer, *Tüketim Örtüntileri ve Osmanlı Magazaları, Cogit, 5 yaz* (İstanbul, 1995) : 25-28.

- (10) 佐々木紳前掲論文。J. シュトラウスは、専制政治とよ

ばれたアブデュルハミト二世期(在位一八七六―一九〇九)における印刷・出版の興隆は、各言語の文字・文章および文章語の発展に多大な役割を果たしたことを強調する(J. Strauss, “‘Kitûp ve Resâil-i Mekûe’: Printing and publishing in a multi-ethnic society,” in Elisabeth Özdalga, ed., *Late Ottoman Society: The Intellectual Legacy* (London, 2005) : 225-253)。

- (11) 永田・江川前掲書一四〇―一四一。

- (12) 永田・江川前掲書一四一。

- (13) 本稿で扱ったポスター印刷所一覧に関しては、Nagata, Yuzo and Egawa, Hikari, *Bir Kentin Toplumsal Tarihi Açısından Osmanlı'nın Son Döneminde İstanbul'da Tiyatro ve Çevresi* (İstanbul, 印刷中)でも紹介した。

- (14) 上演年は無記載だが、ポスター内の諸情報から推定可能な上演年を含む、一八八一年から一九二三年までとなる。

- (15) And, Metin, *Mesrûiyet Döneminde Türk Tiyatrosu* (1908-1923) (Ankara, 1971) ; *Tanzimat ve İstibdat Döneminde Türk Tiyatrosu* (1839-1908) (Ankara, 1972) (それぞれの巻末上演リスト)、一七〇点の史料の概要に関しては永田・江川前掲書(八〇―八四)を参照されたい。

- (16) ヴェイユ、アラン著、竹内次男訳『ポスターの歴史』(白水社、一九九四)一四、一六。

- (17) 『法令集 (*Düstur*)』II : 227-228.

- (18) 永田・江川前掲書一〇二—一〇三。¹⁰⁾
- (19) Duman, Hasan, *Haz. Başlangıcından Harf Devrimine Kadar Osmanlı-Türk Sıireli Yayınlar ve Gazeteler Bibliyografyası ve Toplu Katalogu*, 1828-1928, 3. c. (Ankara, 2000) .
- (20) 一九一五年のイスタンブル市役所から出版された統計年鑑によれば、イスタンブルには、トルコ人四五、ユダヤ人一〇、アルメニア人四九、ギリシア人三八、その他の「外国人」七、合計一三六(ママ)の印刷所があり、定期刊行物としては、オスマン語四三、ペルシア語一、アラビア語三、「ユダヤ人の言語」(‘Jewish’ (‘Müserri’))「四、アルメニア語六、ギリシア語五、フランス語四、英語一紙・誌が発行されていたという (1330 senesi İstanbul beldelesi ıhsaıyyat mecmuası (İstanbul, 1331) : 112 (Strauss 前掲論文 二四四 (註五))。
- (21) 永田・江川前掲書二九—三〇七. Ayınur, Hatice, “Ma’lûmatçı Mehmed Tahîr,” *Türkiye Diyanet Vakfı İslam Ansiklopedisi*, 27 (İstanbul, 2003) : 545-546.
- (22) 『情報』誌は、バックナンバーを最も多く所蔵するイスタンブルのハック・タールク・ウス図書館司書が、「最も混乱した雑誌」と呼ぶほど、発行周期や巻号数などが無秩序な「司書泣かせの雑誌」として知られている。第一シリーズは、アルメニア人アサドウリヤンを中心に、一八九四年に創刊されたが、翌年の一八九五年にターヒル・ベイがその運営を引き継いだ以降は、第二シリーズの『絵入り

- 情報』誌」として区別され、一九〇三年まで続いた (Üçman, Abdullah, “Ma’lûmât,” *Türkiye Diyanet Vakfı İslam Ansiklopedisi*, 27. İstanbul, 2003 : 542-43, 543-545)。
- (23) 永田・江川前掲書一九七—一九九。
- (24) 永田・江川前掲書二九四—二九五。
- (25) Koloğlu, Orhan, “Ebûzîziya Tevîk,” *Dünden Bugüne İstanbul Ansiklopedisi*, 3 (İstanbul, 1994) : 123-124. シュトラウスは、エブツズィヤ・テウフィクが当時のオスマン印刷・出版業者の質と美徳とをもっとも兼ね備えており、印刷業者、編集者、ジャーナリスト、評論家、辞書編集者でかつ作家であったはどきわめて多才であったと述べている (Strauss 前掲論文)。
- (26) Koloğlu, Orhan, “Matbaalar (Tanzimat’ıan Bugüne) ,” *Dünden Bugüne İstanbul Ansiklopedisi*, 5 (İstanbul, 1994) : 310.
- (27) イスタンブルにおける近代演劇を中心とした地区景観に関しては、永田・江川前掲書(六二—七八)を参照。
- (28) Setopyan, Vagarsag, “Ermeni Basımevleri,” *Dünden Bugüne İstanbul Ansiklopedisi*, 3 (İstanbul, 1994) : 181-183. 上のセロプヤンの説明の中で共和国以後のアルメニア系印刷所として「中央印刷所」があるが、17番のそれと同一か否かは未確認である。
- (29) 『法令集 (Düstur)』をはじめ政府刊行物を印刷・出版する、公的性格が強い印刷所。

- (30) 一七二九年から一八七五年までの間にオスマン帝国領域内で操業していた印刷所一覧 (Baysal (Bagra), Jale, *Müteferrika'dan Birinci Mesrutiyeteye Kadar Osmanlı Türklerin Basıkları Kitaplar* (İstanbul, 1968) : 51) に、²⁵ 未来の星 (創業一八七一年) と¹³ アラムヤン (創業一八七二年) とが記されている。一九世紀後半にイスタンブルの印刷業をけん引したジャンク・アラムヤンの息子ネルセス・アラムヤンは、一八九一年から九八年までの間に八冊の書籍と、トルコ語 (Sihah) とブルガリア語の新聞二紙を発刊した (Sevopyan, “Ermeni Basimevleri”)。¹³ は、このアラムヤン印刷所と考えられる。
- (31) たとえば、一八七四年から七六年まで週二回、延々一〇四号発行された娯楽紙『演劇 (Tiyatro)』の印刷所は、タルタルヤン社印刷所であった (Duman no.2183)。
- (32) Duman no.1591. *Nana* は、アルメニア語の女性名、あるいは「老婆」という意味もあるが、演劇専門紙という性格からエミール・ゾラの自然主義小説『ナナ』(一八七九年) からとった可能性が高いと推察される。
- (33) Strauss 前掲論文。
- (34) Yıldız, Gülu, “İstanbul’da Bir Acem Matbaası: Kitiapçı Tahir ve Ahter,” *Osmanlı Arastırmaları*, L (2017) : 175-218.
- (35) Strauss 前掲論文。
- (36) Sevopyan, “Ermeni Basimevleri”.
- (37) Duman no.2181, 2299.
- (38) Sevopyan, Vagarsag, “Ermenice Basım,” *Dünden Bugüne İstanbul Ansiklopedisi*, 3 (İstanbul, 1994) : 188-190.
- (39) Sevopyan, “Ermeni Basimevleri”, 181-183. 19世紀オスマン帝国におけるアルメニア人をはじめとする非ムスリム臣民にとって新たな民族語教育の活動および同活動がもつ政治性に関しては、上野雅由樹「タンズイマート期アルメニア共同体における学校教育の普及過程」『日本中東学会年報』二五—一(二〇〇九)、一四—一六四; 「アルメニア人オスマン官僚の教育的背景」秋葉淳・橋本伸也編『近代イスラームの教育社会史—オスマン帝国からの展望』(昭和堂、二〇一四)、一三八—一六四。
- (40) Duman no.1712.
- (41) Özege, M. Seyfettin, *Eski Harflerle Basılmış Türkçe Eserler Kataloğu*, 5 c. (İstanbul, 1971-79) .
- (42) ヤーージュによる一八四〇年から一九四〇にかけて出版されたオスマン・翻訳小説カタログ (Yağcı, Ahu Selin Erkul, haz. *Katalogue of Indigenous and Translated Novels Published Between 1840 and 1940* (http://kisi.deu.edu.tr/sehim.erkul/Erkul_Catalogue_July_2011.pdf)).
- (43) Yalçın, Alemdar, *II. Mesrutiyette Tiyatro Edebiyatı Tarihi* (Ankara, 2002) (2. Baskı) : 309-318.
- (44) 佐々木紳前掲論文。

(明治大学文学部教授)